

こども病院における小児歯科開設後2年間の患児
の実態調査

○柳田憲一、西垣奏一郎、長谷川尚都、
野瀬可奈子
福岡市立こども病院・小児歯科

【目的】

福岡市立こども病院は、昭和55年9月西日本唯一の小児総合医療施設として開院したが、当時はまだ小児歯科の設置は行われなかった。その後、平成26年11月福岡市中央区から東区への移転及び新病院の開院に伴い、翌平成27年4月1日に小児歯科が新たに開設され2年が経過した。当病院には福岡市・県のみならず九州各県をはじめとしていろいろな地域からこどもたちがさまざまな疾患を抱えて来院する。必然的に小児歯科にも同様なこどもたちが受診する。こども病院における小児歯科の役割を考察することを目的として、開設後2年間の来院患児の実態調査を行った。

【対象と方法】

福岡市立こども病院・小児歯科開設時の平成27年4月1日から平成29年3月31日までの2年間に小児歯科を受診した初診患児1164名(男児589名、女児575名)を対象として電子カルテをもとに実態調査を行った。

【結果】

1) 初診時年齢：初診患児の平均年齢は5.9歳であった。年齢分布では、0歳児が313名(26.9%)ともっとも多く、3歳児までで628名(53.9%)と半数以上を占めた。
2) 主訴：口腔疾患の予防管理が929名(79.8%)と大多数を占めた。そのうちの499名は心臓手術の周術期の口腔衛生管理依頼であった。一方で齲蝕治療が主訴であったのは87名(7.5%)に過ぎなかった。

3) 紹介元：病院外からの紹介は141名(12.1%)で、多くは病院内の他診療科からの依頼(1023名、87.9名)であった。そのなかでも循環器科が突出して多く887名(76.2%)であった。

4) 合併症：887名の心疾患以外には、ダウン症53名、てんかん41名、精神遅滞37名、脳性麻痺25名、自閉症17名で、疾患をもたない健常児は68名であった。

5) 全身麻酔下集中歯科治療：齲蝕治療を主訴に持つ患児の多くは障害や全身疾患、もしくは低年齢児であり、歯科治療においては全身麻酔下での集中歯科治療の適応となることが多かった。2年間の全身麻酔下集中歯科治療は98症例であった。

【考察】

当小児歯科は現時点でこども病院内にある病院歯科としての役割が強く、多くは当こども病院内にかかる患児である。その中でも循環器疾患をもつこどもの口腔管理を行うことで、心内膜炎の予防を実践しながら、安心して心臓外科手術が受けられるよう、口腔内からサポートをしている。しかしながら、当小児歯科のもう一つの役割は、こどものための総合病院にある小児歯科として、障害や全身疾患のため地域の小児歯科や一般歯科では歯科疾患の治療が難しいこどもの受け皿となることである。今後は、地域の中の小児歯科としての役割をさらに拡大していく必要があると考えている。

【文献】

1. 柳田憲一 他：こども病院における周術期の口腔衛生管理の取り組み 日本口腔ケア学会(抄) 187 2017